

ヴァン・ゴッホと日本

稲賀繁美

(一般:比較文化、フランス語、専門:フランス語、
大学院:比較文化専修 芸術論担当)

1890年は画家ヴァン・ゴッホ没後百周年にあたり、本国オランダやフランス、また日本でもさまざまな催しが行われた。担当教官はこの年ユネスコの招きでフイレンツェにおける「東洋の印、西洋の印」に参加のち、ゴッホ終焉の地、バリ郊外はオーヴェール・シュル・オワーズにおいて、「ゴッホと日本」と題する講演を行った。授業では、スライドを交えてこの出張の様子や講演の内容を学生諸君に紹介した。日本とヨーロッパとの係わりを、ひとりの特権的な画家とその周辺に連なる一箇の研究者の経験から考察した。要旨

1 周知のようにゴッホは日本の版画を模写した作品を残している。『タンギーの肖像』の背景にある浮世絵もそのほとんどの原作がゴッホの遺品のなかから発見され、また芸者を描いた絵も雑誌『ル・ジャポニイリュストレ』の表紙を飾った英泉の「花魁」を利用したものだ。だが、種明かしは、浮世絵で覆い尽くされた背景の意味を明かしはしない。浮世絵から借用した架空の背景の上に現実の世界(タンギー)を重ねるといふ入れ子細工の手続きを何重にも重ねるゴッホ。それは現実から虚構の世界へと参入するための魔術的な儀式的現場ではなかったか。

2 原色の色彩が横溢する、夢の世界としての日本。それは既にバリ時代の広重『名所江戸百景』からの模写である『梅屋敷』、『大橋、あたけの夕立』に先取りされている。その「日本のような光に溢れた」南フランスのアルルに移った画家は、今度は扉の閉じた自分の寝室の内部を何度となく描くことになる。見知らぬ土地に来て、不安を紛らわすために、まずとりあえず自分の身の回りを整理するのは、精神の安定を得るために誰だってする一種のおまじないだ。身辺の整理がつけば外の世界を探検してみる勇氣も湧いて来る。だがゴッホは単に整頓された寝室を絵に描いたのではない。逆に「眠りと休息と」が感じられるような「絵」によって自分の寝室を描こうというのだ。安定した現実を絵に描くのではなく、逆に絵によって現実に安定を与えるという転倒。これは既に魔術的な思考であろう。絵によって自分の寝室に安息を与え、心の安らぎを得る。それから、画材道具一式に身を固めて「出勤」し、外界の「恐ろしい世界」と格闘(「写生」)したあげく、夕方には疲れ果てて寝室に退却してくるゴッホの一日。画家にとって外の世界がいかに強迫的に迫ってくるものだったかは、例えば死の直前の作品『オーヴェールの教会』が描かれた現地を訪れば実感できる。ゴッホは背にした土手に支

えられてやっと、眼前を圧倒する教会の姿を正視することもできたのだ。実際の場所からカメラを向けても、土手に遮られて「引き」が取れず、標準レンズでは教会はとても視野に収まりきれない。

3 ゴッホが日本に興味を抱いたのは偶然ではない。当時バリを中心とするヨーロッパの大都市では日本美術が空前の人気だった。その中でゴッホはなぜ日本を理想視したのだろう。また大正の青年たちは、なぜあれほどまでゴッホに魅了されたのか。

課題

知っているつもりのゴッホだが、調べれば調べるほど謎が現れてくる。授業で配布した資料を手掛かりに、未知の発見へと調査の手を延ばして見よう。

参考文献

- 担当教官の出張記録については『学園だより』91, No. 110を参照。● フランス語による講演原稿は三重大学人文学部紀要『人文論叢』第8号、1991、77-93頁を参照。やや改変した日本語版は『ユリイカ』1990年12月号「特集 ヴァン・ゴッホ」に発表の拙稿を参照。
- ゴッホの手紙については、みすず書房版が付属図書館にもあるが、場所によっては誤訳や脱落が散見される。むしろ岩波文庫『ゴッホ手紙』の略伊之助訳部分訳をお薦めする。フランス語では最近、Vincent van Gogh, *Correspondance générale*, 3vol. Gallimard, 1990 出版。1960年版の再刊。
- 日本におけるゴッホ受容を集大成した著作としては、木下長宏『思想としてのゴッホ』学芸書林 1992。Carol M. Zemel, *The Formation of a Legend, Van Gogh Criticism 1890-1920*, UMI Research Press, および Nathalie Enich, *La Gloire de van Gogh*, Editions de Minuit, 1991の欠落を補う著作であり、また小林秀雄『ゴッホの手紙』風土への批判書。
- 日本におけるゴッホ研究としては、高階秀爾『ゴッホの眼』青土社、1988(上記『ユリイカ』に稲賀による批判あり)。また世界的な評価を得た若き学究のTsukasa Kōdera, *Vincent van Gogh, Christianity versus Nature*, John Benjamins Publishing Company, 1990 が読みやすい。藤村信『ゴッホ 星への旅』岩波新書(上下)、1989も独自の調査に立脚した力作。パスカル・ボナフー著、高橋啓訳『ゴッホ、燃え上がる色彩』創元社、1990は一般むきのポケット版原著の縮約版だが、巻末の証言資料が役に立つ。
- 最近の日本における展覧会カタログとしては、国立西洋美術館『ゴッホ展』、1985、および国際シンポジウムの記録『ゴッホ展記念シンポジウム』、東京新聞、1989。また京都国立近代美術館、世田谷美術館『ゴッホと日本展』、1992が重要。
- 欧米における19世紀後半以来の日本美術熱、いわゆる日本趣味に関しては、大島清次『ジャポニスム』、講談社学術文庫、1991(稲賀解説)が入門書として簡便かつ刺激的。また西洋美術館『ジャポニスム展』、1988、世田谷美術館『アメリカのジャポニスム』1990-91、『Japanと英吉利西 日英美術の交流1850-1910展』、1992のカタログが貴重で今の間なら入手可能。さらなる文献についてはこれらの索引を参照。

地域研究の方法論に関する研究報告書

1993年3月

三重大学人文学部文化学科